



Mindy Kornhaber: Trump's Intelligence

トランプ氏の知能

本記事は 2016 年 5 月 13 日に下記 URL にて公開されました。

<http://multipleintelligencesoasis.org/mindy-kornhaber-trumps-intelligence/>

訳 (2017 年 1 月 19 日) : 上條雅雄・有賀三夏・森田晃太郎

世界中のメディアは飛んで火にいる夏の虫のごとく、ドナルド・トランプ氏の賛否両論入り乱れる報道を日々流しました。その結果、トランプ氏はここ一年、私たちの普段の話題の一つとなりました。どのようにして、トランプ氏のように公務の経験がなく、政策上の問題（例えば、アメリカにおける中絶、メキシコの国境問題）について無知を証明した人が、共和党のライバルを完全に上回ったのでしょうか？トランプ氏にはそれほどの天才とも呼べる才があったのでしょうか？私は知能指数（以下 IQ）と多重知能理論（以下 MI）の観点から考察してみたいと思います。

IQ：知能指数

2013年5月8日、大統領選候補トランプ氏はツイッターで「皆さんが知っての通り、私のIQは最高です」と呟きました。トランプ氏は根拠のない発言を多くすることで知られており、この呟きもその一つです。インターネット上の資料によると、トランプ氏のIQは125から156と言われています。ただし、この値は事実であるか厳密な方法で算出されたものであるかは分かりません。IQがSATなどと高い相関があるとは現状では証明されていないため、私たちにはトランプ氏の有意なIQは分かりません。もしも、トランプ氏が自身のIQを把握しており、それが非常に高い値であるならば公の書類として公表しているであろうと考えられます。

ここで議論のために、トランプ氏のIQにたいする自己評価が正しいとしましょう。ではトランプ氏が高IQであるということは、アメリカと、さらに世界中の人々の幸せの向上につながるのでしょうか？社会にとっての「良し」を研究する The Good Project

(thegoodproject.org) を率いるハワード・ガードナー博士は、IQの高さと社会的に良とされる行為は相関性がなく通常は独立して考えるものと述べています。たとえトランプ氏のIQが高かろうとも、トランプ氏が自身の職場で道徳的に振舞うかを保証するものではありません。数人のナチスの幹部のIQは130以上でした(上位2.4%)。私は彼らのIQのスコアを一覧にして自分のオフィスの外に貼っています。重要な点をまとめましょう。IQはその人の道徳、価値や重要度を測るものではなく尊厳を守るものではありません。

もしもトランプ氏に最高のIQがあるのならば、そのような高いスコアは国のトップの仕事には必要ありません。ニューヨークの複雑なハイファイナンス・ビルディング・プロジェクトや、国家の政治運営の管理をしているほとんどの人たち(または、トランプ氏のように大学を卒業した者)は、大統領になるには十分なIQをもっていると言えます。具体的な例を挙げるのであれば、IQ100以上でしょう。異常に高いIQは重要で複雑な仕事をこなす上の必然ではありません。DNAを発見したノーベル賞受賞者のワトソン教授もクリック教

授も IQ は 130 を超えはしませんでした。シロアリ (ルイス・ターマン博士による、シロアリと呼ばれる IQ140 を超える天才たち) についての縦断研究では、高い IQ と真の成功との関連は見られませんでした。ここでの要点は、もしもトランプ氏の IQ が最高であったとしても、それは大統領になるために必ずしも必要ではないということです。

もしもトランプ氏が大統領補者の中で最も高い IQ をもっていたとしても、対抗者と比べてトランプ氏がどれくらい良い大統領になるかを示すものではないでしょう。統計の立場から言えば、そのような関連性を出すためには、立候補者の数はあまりに少なく、IQ の値は信用性に欠けます。一般的に、IQ は職業における中程度の予測的妥当性を示すものです (例えば、販売員と会計士、ロケット科学者)。そして IQ は、職業上の業績を予測するものではありません。つまるところ、IQ は誰が良い会計士になるか、大統領になるかを予測することには役には立ちません。

Multiple Intelligences (“以下 MI”) : 多重知能理論

IQ は職業上の業績を予測するものではないということは、仕事の成功には IQ によって調査されない能力が必要であることを示しています。これはなぜならば、IQ テストは 20 世紀初頭、教育の需要の高まりとともに必要となり、学力を測るものとして開発されたからです。学力を測るためのものなので、言語、数学、そして論理に重点が置かれました。IQ テストはそのような要素を測るのが目的であれば最適です。そのような方法で算出された学力のことを一般知能と呼びます。

ガードナー博士は、学力の説明と予測をするのではなく、人が高度な問題解決を可能とし、日々の暮らしをよりよいものにするための能力を明らかにするために MI を開発しました。したがって、MI は IQ よりも現実社会においてその人のもつ問題解決能力を明らかにします。

ガードナー博士は自身の専門分野である認知発達、神経心理学、言語学、比較心理学、人類学、そして心理統計学の各研究の分析により、人には少なくとも8つのそれぞれが独立した役割をもつ知能があることが明らかになりました。8つの知能は、言語的知能、論理・数学的知能、空間的知能、身体・運動的知能、音楽的知能、対人的知能、内省的知能、博物的知能です。学校で出される標準テストは、言語的知能と論理・数学的知能のみを測定する場合がありますでしょう。

もしもトランプ氏の自己評価がその通りであり高IQをもっているのであれば、氏の政治活動を応援し支持を得ることができる言語的知能と、会社の将来の倒産を見通せるだけの論理・数学的知能をもっていることになります。しかしIQは政治活動とリーダーシップに必要な不可欠である要素に関して一切触れていません。その要素とはMIという対人的知能と内省的知能にあたります。

トランプ氏、そして高い地位を目指している人たちは、隣の人よりも自分の方が優れていると知っていることでしょう。このような人たちの内省的知能は強いか弱いかに分かります。内省的知能は自分を理解する能力で、自分が将来どうありたいかを考察します。

内省的な面では、トランプ氏は自分の気持ちと動機を理解しているかもしれません。氏からは世間の注目を浴びたり、大胆な政治演説を行うことで動機を保持しようとしていることが明らかに見て取れます。このような行為を様々な心理学者がナルシストと呼びました。(Vanity Fair、2015年11月11日オンライン参照)。

しかし問題となるのが、トランプ氏の内省が誰かの効率的な人物モデルを必要としていることです。氏は明らかに人気のエンターテイナーやビジネスマンである要素が自身の強みだと思っており、次は憲法を管理し変更を加えるような民主主義の大統領を目指すでしょう。しかし、会社とは違い、議会や最高裁判所に「お前は首だ！」と突きつけることはできません。

対人的知能は他人の動機や、彼らが必要としているものの理解を可能にします。トランプ氏が11月の選挙に向けて準備をしていますが、氏はこれまで以上に対人的知能に頼る必要がでてくるでしょう。この場合は対人的知能の二つの側面が重要になります。

最初に、選挙に出るためにトランプ氏は支持者の動機を理解することが重要です。そうすれば支持者との良い利害関係（もちろん、悪い方向に働くこともあるでしょう）を築くために動くことでしょう。トランプ氏は結果的に、共和党の対抗者よりも多くの票を集めることで、十分な対人的知能があることを示しました。氏は共和党の一部が低所得者を経済的に不利にし（おそらくは移民による理由）、あるいは低所得者が政治家によって無視（あるいは、買収）されていると理解しています。近々、氏は立候補者としての自身の姿を犠牲者や部外者としたイメージにすることで、同調する人々からの票を得ようとしています。また、通常の典型的なイメージをあえて壊していくことで、政治に嫌気が差している人を惹きつけることを理解しています。

しかしトランプ氏が本当に選挙に勝ちたいと思うのなら（そしてもちろん、氏は勝者であり敗者ではない！）氏は自身の対人的知能を使って、まだ氏の魅力に気づいていない人々からの支持を得る必要があるでしょう（そして、ヒラリーは苦戦する）。トランプ氏は自分を売り込むことが得意な人物です。もしかすると選挙に、勝つかもかもしれません。

二つ目は、トランプ氏が選出された場合、氏は自分と志、興味、そして動機の異なる人と少なからずも一緒に働く必要性があります。これにたいして氏は対応する姿勢を見せています。氏には内省的知能を通して自分を見つめ、大統領のような職務では政治に精通している人々の協力が不可欠ということ意識する必要があります。また、氏は自身の知識と経験を上回る他の国々の強力なリーダーを相手に対峙する方法が必要になってくるでしょう。

要約すると、優れた大統領になるには異常なほどの高IQを必要とはしません。さらにいうならば、IQは内省的知能と対人的知能を測定しませんが両方とも選挙に勝つためには必要なものです。トランプ氏は元々の支持者から票を得られるだけの十分な対人的知能をもちます。もし

かすると、選挙戦の11月には大多数の有権者からの支持を得ているかもしれません。しかし POTUS (歴代の偉大なる大統領) のようになるためには、氏は強力な対人的知能を求められるでしょう。残念なことに、氏は他人の気持ちを考えたり、褒めたり、自分が首にすることができない人と一緒に働くことを良しとしません。また、十分な内省的知能を求められますし、時には自分が目指すべき人物のモデルがない状態でオフィスに入らなければならないこともあるでしょう。氏は自分のことを素晴らしく成功者として認識しているかもしれませんが、さらなる試練が待っています。氏のIQがどうであれ、今の氏の内省的知能と対人的知能の強弱差は激しく今後の業務の妨げとなるでしょう。そしてそれはまた、アメリカと世界の間で大きな問題として取り上げられうる事実です。

ミンディ・コーンハイバー博士はペンシルベニア州立大学助教授。ハーバード教育学大学院において10年余、研究員として勤めた後、2001年に教授に選出。社会政策と人間発達を研究し、両方の視点から、どのように組織と、組織の周りの政策は個人の能力の開発に役立つかを課題としている。ここ数年、政策が影響を及ぼす教育環境と、学生の知的発達に注目。また、多重知能理論が授業に与える効果や、学校改革にも注目している。

上條雅雄： ソニー株式会社の部長として名古屋大学院国際言語文化研究科の非常勤講師として、「メディアプロフェッショナル論」(メディア・夢・ライフスタイル論)(2003-2007)を担当。ハーバード教育学大学院のハワードガードナー教授、ミンディ・コーンハイバー博士とは1999年から多重知能理論を通して交流している。日本MI研究会会長。明治大学サービス創新研究所・客員研究員、東北芸術工科大学客員研究員。

有賀三夏： 画家、アートセラピー研究者、東北芸術工科大学講師。女子美術大学大学院洋画卒業。カンザス・ピッツバーグ州立大学 Master of Arts 修了。ボストン・レスリー大学大学院 Interdisciplinary 学部 Art Therapy and Healing Art studies in Education 修了。2009年よりハーバード教育学大学院・多重知能理論研究プロジェクト・ゼロに参加。明治大学・死生学・基層文化研究所研究員、明治大学・サービス創新研究所研究員、富山大学非常勤講師。O-1米国卓越能力保持者ビザ認定アーティスト(2009年～)。作品所蔵・佐藤美術館など。著書：『女子

大生に超人気の美術の授業』(幻冬舎/2015) 『Three Little Ones and the Golden Mane (ちっちな3匹と黄金のたてがみ) 』(Createspace/2010) など

森田晃太郎： 香港、ニュージーランド、フランス、アメリカで育った後、2009年にアメリカ・ボストンで株式会社 Daruma The Factory, Inc.を設立。日本のだるまをモチーフにしたキャラクターをデザインして、ボストンで紹介。また、このキャラクターは幼児教育を主とした絵本などに登場し、セサミ・ストリートやおさるのジョージを制作している WGBH テレビ等で取り上げられている。

1) ターマン Terman , Lewis M(adison)

[生]1877.1.15. インディアナ , ジョンソンカウンティ

[没]1956.12.21. カリフォルニア , パロアルト

アメリカの心理学者。スタンフォード大学教授。35年にわたる優秀児の追跡的研究およびビネ=シモンの知能検査のアメリカ版(→スタンフォード=ビネテスト)作成で著名。主著『知能の測定』The Measurement of Intelligence (1916) , 『優秀児の成長』The Gifted Child Grows Up (47 , M.オーデンと共著)。